

変わる日本の「暮らし」と「まち」

団地とまちの未来を拓く
画期的なプロジェクトが進行中

神奈川県横浜市 洋光台団地
団地の未来プロジェクト
(2015年・平成27年)

阿部民子

text by Taniko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

横浜駅からJR根岸線に乗って約20分。洋光台駅は、1970年（昭和45年）、磯子駅止まりだった根岸線を延伸して新設された。同時に、日本住宅公団が周辺の丘陵地を開発。駅を中心にして、洋光台中央、洋光台北・西の3団地がつくられた。

現在、この団地を舞台に繰り広げられているのが「団地の未来プロジェクト」だ。8月1日、プロジェクトの一環である洋光台中央広場のリニューアルを祝うセレモニーが開催された。会場には、プ

ロジエクトを推進する建築家の隈研吾氏と、クリエイティブデザイナー佐藤可士和氏が顔をそろえた。

リニューアルされた広場は、各界の有識者や住民の意見を取り入れながら隈氏がデザイン監修を行い、佐藤氏が広場に掲げるサインやMAPをデザイン。広場の周囲には山型の屋根が連なる庇を配して、広場と2階デッキの2層で人が回遊し、集い、溜まることのできる「立体緑側広場」を創出。緑台を思わせる木のベンチなどの

った。

セレモニーでは、プロジェクトをプロデュースしているURの理事長、中島正弘が「URには約73万戸の団地がありますが、少子高齢化など時代の変化にどう対応するかが大きな問題になっています。このプロジェクトを通じて、団地を活性化してにぎわいを取り戻し、すばらしいコミュニティにするという課題に取り組んで、新しいソリューションを見つけていきたい」とあいさつ。

隈氏は「日本の団地は世界的に見てもすごく特別なもの。これだけの志をもってパブリックハウジングをつくり、こんな豊かで大きな広場空間をコミュニティスペースとしてもっているところは他にない。団地という昭和のエネルギーの産物をなつかしむだけではなく、磨いて未来に継承していくことが、日本再生の1つの足場になるのではないか」とエール。佐藤氏も「いまは共創の時代。住民のみなさんはもちろん、URと横浜市、神奈川県、我々クリエイターの力を合わせ、世界中から注目されるプロジェクトにしていけた

団地とまちの再生を目指して

昭和40年代の高度成長期、住宅不足を補うために全国に大量供給された団地。当時最先端の設備を備え、人々の憧れだった時代から40年以上がたち、この資産を次世代につなぐためにどう再生し、新しい時代の輝きを与えていくのか。

その解決策を考える場としてURは2011年に洋光台団地をモデルケースにした「ルネッサンスin洋光台」を始動。隈氏や佐藤氏など6名の有識者からなる「アドバイザー会議」と、地域住民や行政担当者による「エリア会議」を設け、団地の再生を機にまち全体の活性化に取り組んできた。

その成果を踏まえ、隈氏をディレクターアーキテクト、佐藤氏をプロジェクトディレクターに迎え入れ、URが培ってきたノウハウを結集。2015年に満を持して立ち上げたのが、「団地の未来プロジェクト」だ。

プロジェクトでは、継続的に団地の価値を上げ、よりよい社会づくりに貢献するためのさまざまな



中央、中島正弘UR理事長を挟んで左側に隈研吾氏、右に佐藤可士和氏。

取り組みを展開してきた。冒頭の広場リニューアルのほかにも、洋光台中央団地ではエアコンの室外機を、アルミに木目印刷を施した木の葉パネル^①で隠して、住棟外壁をリニューアル。今後も、アイデアコンペ優秀案をベースとした洋光台北団地集会所の大改修や一部高層住棟の建替えなど、画期的な取り組みが目白押しだ。

地域と連携してまちを活性化

「団地の未来プロジェクト」は、単なる団地の再活性にとどまらず、地域と連携し、地域全体の活性化を目指しているのも大きな特徴だ。洋光台まちづくり協議会長であり洋光台連合自治町内会長も務める三上勇夫さんは語る。

「隈さん、可士和さんも、すごく自然な感じで一緒に活動できていますし、URが団地を活用して地域の活性化をやってくれるなんて、夢みたいな気持ちでしたね。コミュニティ活動に使える『CCラボ』というスペースも提供していただき、そこを拠点に5000人も集まるハロウィンなど地域活動も生まれています」

URの団地マネージャー山下健も「地域の方が主体的にやっていたからこそその成果だと思っています。今後も、広場改修に伴って新たに生まれた2階部分の店舗に、雑貨・アクセサリーなどのクリエイターが出店する「クラフトマルシェゾーン」をつくり、11月24、25日は、ハンドメイドのクリエイターが集う『洋光台クラフトマルシェ祭』の開催を予定するなどソフト面での取り組みも高い、地域の方と手を携えてまちの活性化を図っていきたい」と話す。

全体のプロジェクトディレクターを務める佐藤氏は「洋光台から生まれた取り組みやアイデアが発展することで、日本にたくさんある団地の再生だけでなく、日本の住まい自体に一石を投じるものになる」と期待を込める。団地と日本の明るい未来に向かって、プロジェクトはこれからも続く。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社